

生化学若い研究者の会「第60回 生命科学夏の学校」開催報告

畠中 惇至¹, 田中 美樹²

(¹第60回 生命科学夏の学校実行委員長 同志社大学, ²事務局長 広島大学)

「生化学若い研究者の会（以下、弊社）」は、日本生化学会後援のもと、生命科学分野の研究に携わる大学院生を中心に構成されています。北海道から九州までの八つの地域で研究セミナー等を開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム掲載等のアウトリーチ活動を行う「キューベット委員会」、そして年に一度の滞在型研究交流会である「生命科学夏の学校（夏の学校）」の三つの活動を行っています。

今年の「第60回 生命科学夏の学校」は、コロナ禍のため当初予定していた2泊3日の合宿形式での開催を取りやめ、オンライン会議システムRemoを使用して2日間にわたり開催しました。初のオンライン開催のため何もかもが手探りの状態でしたが、幅広い専門分野を含んだ115名（うち、講師9名）の方々に全国各地からご参加いただきました。

「第60回 生命科学夏の学校」企画趣旨

多様化する現代社会において研究者は、幅広い知識や視野をもち異分野の研究者とも協働することが求められています。しかし、若手研究者が日常的な研究生活でこれらの能力を身につけることは非常に困難です。生命科学夏の学校は上記の社会的ニーズに応え得る若手研究者育成の基盤となることを目指し、各分野の第一線で活躍されている研究者を招いた講演会や参加者同士による研究交流会を実施しております。

本年度の夏の学校は「beyond」をテーマとして実施しました。これには「所属や身分といった枠を越えた、さらにはオンライン開催により物理的な距離をも越えた交流をしてほしい。そして、それまでの自分を越えた新たな自分に会ってほしい」という願いを込めています。

ワークショップ

ワークショップでは、5名の先生をお招きしてご講演いただきました。近年ホットな分野であるオルガノイド、多くの参加者が日頃触れる機会の少ないテーマである冬眠、キャリアパスの一つとしてベンチャー企業で活躍されている先生をお招きした講演等、多彩なワークショップを企画しました。オンラインながらも講演終了後の質疑応答は非常に白熱し、有意義な時間となりました。



シンポジウム

近年、研究資金の調達方法としてクラウドファンディングが広がりつつありますが、その経験談やノウハウを知る機会は多くありません。今回のシンポジウムでは、まず講演を通じてクラウドファンディングについて学び、さらには参加者同士のグループワークを通じて研究支援者を得るための研究紹介を実際に考案することで、クラウドファンディングの敷居を下げることを目的としました。

第1部では、クラウドファンディングに関わる4名の講師陣にご登壇いただきました。先生方の経験談は勿論のこと、クラウドファンディング企業の運営者の視点からもお話しいただきました。クラウドファンディングの実状、そして研究と社会との関わりについても示唆を得られるご講演でした。

第2部では、「研究支援者の獲得を目指した研究紹介をしてみよう！」をテーマとして、多様な背景をもつ参加者同士でグループワーク形式の議論を行いました。参加者の専門技術を上手く組み合わせた研究紹介を考案した班や、斬新な着眼点から研究アイデアを提案した班もありました。先生方からのフィードバックでは、本質をついた指摘で思いもしない側面に気づく班もありました。

第1部と第2部を通じ、参加者がクラウドファンディングについて知り、その難しさと楽しさを体験できたようでした。



研究交流企画

先生方の講演だけでなく、若手研究者同士で交流を深められる企画も夏の学校の魅力の一つです。本年度は、研究交流企画として、「研究交流会」、「ポスターセッション」、「自由集会」の三つの企画を用意しました。

「研究交流会」では、初対面の参加者と話すきっかけ作りのために、互いの研究内容や趣味等を紹介し合う場を提供しました。最初は緊張していた参加者も見受けられましたが、すぐに打ち解けて白熱した議論が展開されました。

「ポスターセッション」では、様々な分野をバックグラウンドとする参加者による研究発表が行われ、研究交流会よりも踏み込んだ活発な意見交換がなされました。普段とは異なる視点からの意見・アドバイスを得て、今後の研究のヒントを得た参加者も多いようでした。

「自由集会」では、参加者が日頃気になっているトピックをトークテーマとして、グループに分かれて討論・交流を行いました。幅広くユニークなテーマのもと熱く語り合うことで、参加者同士のつながりも深まったようでした。

夏の学校から広がるもの

「生命科学夏の学校」には“生命科学”に興味をもつ若手

研究者が集います。生命科学は幅広い分野を包含しており、本研究会が扱う内容は非常に多岐に亘ります。そのため、所属する研究室では触れる機会のない分野や、交流する機会のない人と出会うことができます。日頃の研究生活では得難い経験の宝庫である夏の学校への参加は、自身の見識を深めることにつながります。

さらに本年度は、本研究会の発足以来初となるオンライン開催を実施したことにより、移動がネックで参加をためらっていた若手研究者を呼び込み、これまでにない新たなつながりを創出することに成功しました。弊会が主催する支部活動やキュベット委員会活動を通じてこのつながりをさらに深めることで生命科学研究の発展に寄与できるよう、今後とも尽力してまいります。

来年度に開催予定の「第61回 生命科学夏の学校」は、「さあ、集まろう」をキャッチコピーに掲げ、既に準備が進められております。新たな運営スタッフ陣のもと、来年度の夏の学校も盛大に開催されることを心より願っております。

最後になりましたが、本年度の夏の学校の開催にあたり多大なご支援を賜りました、日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆さま、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

